

第三百八十五回青葉会

平成三十年五月二十四日(木) 井の頭公園吟行

午前十時 吉祥寺駅北口 はな子像前集合

午後一時半〜四時 御殿山コミュニティセンターにて句会

〈顧問〉

☆ 川合万里子

〈選者〉

◎ 川口孤舟

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 柿崎忠彦 川口孤舟 小西弘子 山崎亜也 山内天牛

〈投句〉

伊賀山そらお 小早健介 在間千恵 土谷堂哉 豊田ゆたか 中野一灯

古田昇 星田啓子 宮内規雄 山田けい子 渡邊盛雄

《互選句》

三点

◎ 青鷺やのそり出す足忍(しの)び足

亜也 (猛・忠・孤)

二点

◎ 御機嫌は如何山椒魚さまよ

天牛 (紀・孤・弘)

一点

◎ 井の頭籠の鶯鳴きやまらず

紀久男 (忠・孤)

(◎…「鶯」↓「夏鶯、老鶯」)

どくだみや池畔の白きベビーカー

孤舟 (猛・亜)

吾が街の如く華語過ぐ夏の蝶

弘子 (紀・天)

◎ 青葉風背筋を伸ばし橋に立つ

ゆたか (孤・弘)

巡り来て青葉しぐれの朱御堂

全 (忠・弘)

風を飲み尾までまんまる鯉のぼり

啓子 (紀・弘)

◎ 吟行に人それぞれの夏帽子

規雄 (亜・天)

万緑や地蔵の赤きよだれかけ

亜也 (猛・孤)

暗闇に動くものあり暮(ひき)の背な

けい子 (猛・天)

戦なき日々のどくだみ白十字

天牛 (紀・亜)

薔薇の香や大棧橋にクルーズ船(山下公園)

盛雄 (弘・亜)

一点

待ち惚け師の見えぬまま初夏吟行

そらお (紀)

久方に目高眼合せ懐しむ

紀久男 (忠)

萍(うきぐさ)のユラユラユラと漂へり

猛 (紀)

苔生(む)してカミツキ亀の薄暑かな

全 (天)

◎ 新緑のはな子の象舎はや二年

全 (紀)

ちよい辛しはな子カフェの生ビール

忠彦 (孤)

雨男は誰と眩く夏吟行

全 (紀)

夏草やヒト科の檻に鏡のみ

全 (猛)

万緑や平屋一間(ひとま)の童心居

全 (紀)

(建物)は野口雨情の旧書齋。茶会や句会等に貸し出し。かつて川合先生御夫妻、黒川さん、小池

さん、小川さんと何度か催しました)

新緑の色を沈むる神田川

孤舟 (紀)

◎ 独り聞く遠雷先生は如何に

全 (紀)

遠足の子供の後ろへママの列

弘子 (孤)

(「後(うしろ)」↓「後(あと)へ」)

全 (忠)

夏の日も照られづめなりはな子像

全 (忠)

掴むもの探して蔓の夏の空

全 (亜)

白ゆりを活けて満開シヤンデリア

健介 (紀)

病癒え医は仁術と新茶汲む

全 (天)

国宝に見とれし上野新緑光
 初収穫やつと一合豆飯に
 レース編むベニスの老女鼻眼鏡
 鹿嶋立清水湧き継ぐ千代の杜
 (お孫さんがジュニアゴルフ日本代表でサンディエゴへ)
 剣聖の修行せし杜五月闇
 別れゆく風の十字路しやぼん玉
 高層のオーシャンビュウや島薄暑(バリ島)
 転寝(うたたね)に蜜柑の花の匂ひ濃し
 ◎ 人待ちの佳人にさつと夏日差す
 ◎ 垂直に天をめざして花あやめ
 ◎ ホバリングする熊蜂に眼を回す
 新緑の楷(かじ)の樹拝む井の頭
 (孔子廟の樹)
 年輪を重ねし味覚古茶新茶
 千恵 (紀)
 堂哉 (猛)
 全 (天)
 一灯 (紀)
 全 (紀)
 昇 (垂)
 全 (紀)
 啓子 (弘)
 亜也 (孤)
 けい子 (孤)
 天牛 (孤)
 全 (紀)
 盛雄 (紀)

●次回青葉会

六月二十八日(木) 午後五時半〜八時半 文京区民センター
 ▲当季雑詠各自五句 投句は二句
 七月二十六日(木) 午後五時半〜八時半 同右

以上 文責 紀久男

平成三十年六月 青葉会報



一、万里子先生、一年ぶりおいでになられるか半信半疑でしたが、到頭来られませんでした。吉祥寺駅前で弘子さん、亜也さんが交代でお待ちしましたが、一旦向かわれてから帰宅された由で諦めました。今回の吟行は7名参加。投句11名。(今迄は、吟行の為元々投句は2〜3名と少なかつたんですが、今回は何故か多い)

猛さんの披講で御覧のように亜也さん、天牛さんが上位得点でした。

句会場を予約して下さった亜也さんから銀座曙のおかき類と冷酒「菊正宗」、ペットボトルのお茶など寄贈され、小生の純吟「伊丹諸白」(市橋伸彦さんより)、缶ビールなど賞味し乍ら順調に進み、弘子さんから、お世話役された「森の座」初の全国大会の模様(四月東京。来賓黒田杏子、宇多喜代子、榎未知子)を報告されました。

小生、今回病上がりの身に飲み物等の重いリュックを背負つての公園吟行は、さすがに身に応え、参加者の皆様にご心配おかけしましたことをお詫び申し上げます。

二 関係者近詠

借し呉るる本積み上げて春炬燵	眞希子	桜鳥賊腸抜きし手のうす穢れ	青史
下萌えて子供ほどの牧師着任す	全	春一番天道の非をがうがうと	全
啓蟄や長き失せ物届けらる	全	節分や声色つかふ惚け老人	紀久男
天空の青の限りよ初雲雀	弘子	―「森の座」6月号	
畑ゆるく落ちて春光相模灘	全	しつかりと靴紐結び登山かな	允章
すかんぼの下葉の疲れ母恋し	全	ひもすがら雨に匂へる栗の花	全
窓隅まで磨きパンジー近くする	全	鈴蘭の一鉢抱いて退院す	全
サイネリア妻透明の神に近し	青史	源氏より平家儂き蚩かな	恵洲
落味噲や連理の枝の半世紀	全	登山靴紐締めなおしいざガレ場	全
朝ぼらけ早や春耕の人の声	全	白ワインと朝から決めて初鯉	全

下段に続く

―大鉄会五月

きさらぎ句会では初めて文楽総見を企画（正月恒例の初寄席見物―米朝一門会―の外に）。国立・文楽劇場ではなくて、五月一日だけの西宮芸術劇場中ホールでしたので予約即日完売。皆様には好評で来年は歌舞伎を企画している由。

行く春を浄瑠璃の世に浸りけり	盛雄	人形遣い折り目正しき夏袴	寺田智子
人形遣ひの手は国宝ぞ風薫る	全	老頭児の新樹光浴び太極拳	紀久男
人形に命宿れる五月かな	健介	妻の通院新樹の杜を通り抜け	全
呂太夫の浄瑠璃に泣く薄暑かな	寺田智子	ガラ空きにも往時の太夫汗みどろ	全
文楽の別れの段や五月雨るる	全	（昭和30・40年代の文楽は全く不入り、大赤字）	

青史さん（山崎陽亮）が「森の座」第一回新人賞を受賞され、同人の石橋みちこが「青史論」を寄稿（六月号）。掲載句より自選句を除いて抄出してみました。

- 酔海鼠にむせて破談となりにけり
- 蚯蚓には乾びの美学われには何の
- じわじわと海馬のちぢみゆく炎暑
- 聖五月妻のかんばせ神さびて
- 父と子に共通語なし開戦日

三 阪神間の高齢者向け情報季刊誌『につち倶楽部』5月末発行の終刊号（VOL・91）に關西俳句界の大御所、伊丹三樹彦（1920生まれ）のインタビュー掲載。近詠中心の掲載句の内から小生好みの句を抄出してみました。

来し方を映す白寿の壁鏡	臍覗く薄幸の母在りしこと
俳壇を抜き手で泳ぎ白寿会	軒破れたる五月のざんざ降り
白寿の喩会うも別れも句作の縁	冬雲が翳抱く故郷乳房さがす
啖うはかつかつ詠むはすらすら白寿翁	食堂車の散らしの裏に自句のメモ
	妻なけれど花の案内の三姉妹

四 井の頭公園吟行の他句（勝手乍ら）

雨上り弁財天の池涼し	孤舟	上着手にブラウス半袖薄暑かな	亜也
家光の小柄（こづか）の跡や新樹光	全	風の香を思ひつきり吸ふ遊歩道	千恵
子の健闘祈る柏手青葉光	一灯	初夏の陽や祝賀の市民列をなし	そらお
（鹿島神宮）		（ウインザー城の王子拳式）	
青芝に園児の帽子白黄色	猛	轉止み御寺の庭に夫婦きり	規雄